

巨人の足跡を辿る

近代日本を代表する芸術家のひとり、北大路魯山人。人間国宝拒否などの言行から、とかく傲岸不遜と評されがちな「美の巨人」の波瀾に富む生涯を辿り、その素顔と美の世界に迫る。



↑初代須田青華と並んで、陶器の絵付けをする32歳の魯山人（写真奥。須田青華蔵所蔵）。大正4年に石川・山代温泉の須田青華蔵（33ページ参照）を訪ね、ここで陶芸に目覚めた。



←大正4年、山代温泉での魯山人の逗留先だった寓居跡「いろは草庵」（32ページ参照）。魯山人愛用の文机もそのままに残る。

身長175cm、体重100kgの堂々たる体格と不敵な面構え。辺りを睥睨するかのような眼差し。ステッキ片手に東京・銀座を闊歩する姿は威厳と風格に満ち、人々を圧倒したという。北大路魯山人。その類まれなる才能は、書をはじめ、篆刻、絵画、陶芸、漆芸、料理と多岐にわたったり、ひとつの領域にとどまることがなかった。誰の師事も仰がず、独立独歩で美の真髄を極めた異端児の生涯は、明治16年（1883）3月23日、京都に始まる。

真紅の山躰に美を意識する

北大路魯山人は、京都の上賀茂神社の社家、北大路清操の次男、房次郎として生まれた。社家とは上賀茂神社の神官を世襲する家柄のことである。父親は魯山人が生まれる前に死去し、彼は生後間もなく、滋賀県坂本村（現・大津市）の農家へ里子に出される。だが、



→食物史家・平野雅章さん（72歳）。早稲田大学在学中に魯山人に師事。昭和29年には魯山人に随行し、世界13か国の料理を食べ歩く。

あまりの境遇の悪さを見かね、上賀茂駐在の巡査、服部氏夫妻が引き取った。しかしその後、魯山人は養家を転々とする生活を強いられ、身寄りもなく、貧しく、愛情に飢えた幼年期を過ごす。そんな魯山人が3歳の頃に、養母に背負われて上賀茂神社の裏山で初めて目にしたのが、満開に咲き誇る真っ赤な山躰であった。花の色に感動した魯山人は、「自分はこの色から、このような美しいものを生涯追い求めていこう」と早くも心に誓ったという。

北大路魯山人年表

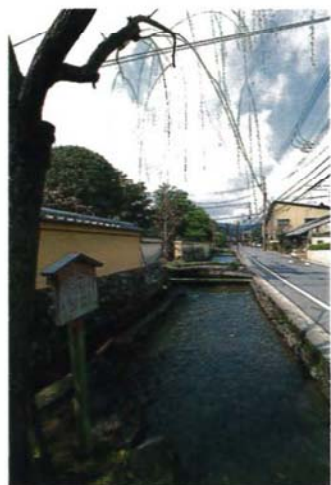
- 明治16年 京都市上賀茂神社の社家、北大路家の次男として誕生。本名房次郎。6歳まで養家を転々。
- 明治22年 京都市上京区の木版師、福田武造の養子となる。
- 明治37年 日本美術展覧会書部の二等賞一席を受賞。
- 明治38年 町書家・岡本可亭に弟子入り。2年後に独立。
- 明治44年 28歳。朝鮮半島、さらに中国へと渡り、古銘碑などを見てまわる。
- 大正2年 福田大観の号で、滋賀県長浜の河路家に逗留。
- 大正4年 石川県金沢、山代温泉へ。北大路姓に戻る。
- 大正8年 36歳。中村竹四郎と、大雅堂芸術店を開業。
- 大正11年 正式に北大路魯山人を名乗るようになる。
- 大正14年 中村竹四郎と、東京赤坂に星園茶寮を開業。
- 大正15年 北鎌倉に築窯。星園茶寮用の食器製作をする。
- 昭和4年 この頃から各地で、精力的に作品展を行なう。
- 昭和11年 53歳。星園茶寮解雇。
- 昭和21年 銀座に陶器直売店「火土火土美房」を開く。
- 昭和29年 71歳。欧米外遊。
- 昭和30年 人間国宝を辞退。
- 昭和34年 入院中の病院で肝臓変で死去。享年76。



←「景德陶家図」（縦29・5×横36・5cm。中国・景德鎮窯の窯場の様子を描く。魯山人55歳の昭和13年作。歌は「自然を手本に作陶せよ」の意。（何必館・京都現代美術館蔵）



↑魯山人が逗留した滋賀県木之本町の「富田酒造」（47ページ参照）にある「酒なお兵のごとし」の書。大正2年頃の作。（富田酒造蔵）



↑魯山人が生まれた京都・上賀茂社家町の行まい。明神川沿いに現在も40軒ほどの社家が残る、重要伝統的建造物群保存地区。



↑母屋と渡り廊下でつながる『小蘭亭』入口にある篆刻扉「蘭亭曲水の序」。中国・紹興の蘭亭に、原文の石碑がある。



→『七本鎗』の扁額が掛かる店内。他にも魯山人作の扁額が掛けられている。[滋賀県伊香郡木之本町木之本1-10-7] ☎0749-82-2013 園8時30分〜18時 休木曜



↑東海道新幹線米原駅からJR北陸本線・湖西線で約25分、木ノ本駅下車、徒歩約5分。



←『七本鎗』右から純米吟醸1・8・8・3770円、大吟醸古酒720ml 5000円、大吟醸720ml 2950円。純米吟醸以上の酒は、伊吹山系の地下水と山田錦、県が開発した酒造米・玉栄を使用。

●蔵元 **富田酒造** ●滋賀・木之本町
江戸時代、北国街道の宿場町として賑わった木之本にある富田酒造は、450年以上の歴史を持つ蔵元。銘酒「七本鎗」を醸造販売する老舗で、魯山人も長浜滞在中はこの酒を愉しんだ。
富田酒造12代蔵元・富田八郎忠明は書画を嗜む風流人で、竹内栖鳳や河路豊吉もよく訪れ、広い交際範囲で知られていた。長浜の河路家に逗留していた魯山人が訪れたのも、ごく自然な成り行きだった。

たのだろう。魯山人はここで、扁額「七本鎗」を制作している。楕の字を酒の器も意味する「鎗」としており、同社でも現在、ラベルの一部に「鎗」の字を用いている。「魯山人も忠明も、ともに当時30代。酒を酌み交わし、自分たちの夢や文化談義をしたのでしょね」14代当主の富田光彦さん(66歳)は、そう語る。
魯山人が愛飲した酒は、辛口ながら、ふくよかな旨味がある。

銘酒「七本鎗」の酒盃を重ねて語り合った、若き夢や思い